



右頁共/このページのアートディレクションも担当するアーティスト、谷本天志デザインのゆかた「イズレアヤマカキツバタ」左右頁は色違い。29,400円、受注生産。谷本天志デザイン半幅帯「菱」メテユンデ 26,250円。大人と兼用できる。川島織物 ☎075-414-9689
右頁中/下駄の台と鼻緒を自由に選べる。足にあわせてすげてもらおうと履きやすい。下駄台3,465円 鼻緒2,310~4,725円
伊と忠 下京区四条河原町東 第2、3、4水曜定休 ☎075-221-0308

撮影/鈴木誠一
AD/谷本天志
着つけ/山崎真紀
ヘアメイク/谷口裕子
モデル/藤川 清

元お茶屋の風情あふれる空間。きちんと座ってお行儀よく。小森パフェ1,400円など 甘味どころ ぎをん 小森 東山区祇園新橋元吉町61 ☎075-561-0504 11:00~20:30(日曜は19:30)水曜定休



通崎睦美の KYOTO アート散歩

ぎをん 小森・浴衣
gion Komori Yukata

4

7月になり、日が暮れてから外を歩くと、祇園祭の鈴の囃子が聞こえる。各鈴町で、お囃子の練習が始まっているのだ。本番とは違い、どこからともなく聞こえてくる音。生まれてこのかた京都に住んでいるが、あらためて「京都だな」と感じる瞬間である。そして同時に本格的な夏の到来を思う。

夏と言えは、浴衣。数年前まで、浴衣は湯上がりに着るもので外出用ではないとされていたが、最近は女性に限らず男性も、そして子供たちもおしゃれな外出着のひとつとして浴衣を楽しんでいるようだ。明治時代に遡れば、確かに湯上がりの着物だが、さらに遡って平安時代にまでいけば、それは入浴中に着用していたもの。昔の風呂は蒸し風呂だったから、入浴時に衣をつける必要があったのだ。その衣が「湯帷子(ゆかたびら)」で、現代の浴衣(ゆかた)の語源となっている。時代と共に呼び方もその役割も、変わっていく。

浴衣でお出かけ。京都で言えばその代表はやはり祇園祭。動く美術館と言われるように、山鉾に掛けられた懸装品の数々はどれもこれも素晴らしい。中でも私が惹かれるのは、室町六角下ルに位置する「鯉山」の毛綴(タペストリー)。古代ギリシャの詩人ホメロスがトロイ戦争を綴った叙事詩「イーリアス」の、重要な場面を描いた図柄だ。これは、1580年から1620年頃にかけてベルギー(当時はフランド州)のブリュッセルで織られた壁掛5枚シリーズのうち一枚。世界的にみても極めて貴重なもので、国の重要文化財に指定されている。

しかし、懸装品は古いものばかりではない。例えば、アンフォルメル(フランスを中心に1950年代に展開された抽象絵画の動向)の代表的な画家、今井俊満も「鈴鹿山」胴掛の原画を手がけている。とはいえ、子供にとっては「花よりだんご」。祇園祭に出かけ、美しい懸装品をじっくり鑑賞というわけにもいくまい。それならば、アーティストがデザインした浴衣を身にまとい、自らがアート空間になってしまう、というのはどうだろうか。

これぞ、まさに、KYOTOアート散歩。